
魔法少女リリカルなのは Light.the. story

クロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Li g n t · t h e · s t o r y

【NZコード】

N00751

【作者名】

クロック

【あらすじ】

闇に葬られた部隊『第七独立武装中隊』。

その部隊にいた天才と対なるもの……もうひとりの天才と称された少年の……エリオット・ラージェストの物語。
彼は失ったものを取り戻せるのか……。大切なものを守れるのか……。そして彼の部下の少年は、そんな彼を助けられるのか！？

shadow.the.storyとは別視点から、とある一年の物語を紡ぎます……。

プロローグ・とある事件の始まり（前編）（前書き）

いつも、クロックです。

これで連載小説は三作品目、そろそろ限界ですかね。
でも全部同じ時間枠の世界なのですが大丈夫なんでしょうかね。で
はどうぞ

プロローグ…とある事件の始まり（前編）

「お前を置いていけるわけ無いだろ？…」

そう叫ぶ誰かの声が聞こえていた、それは置いて行けと誰かに言われたであろう、強き思いのこもった言葉だった。
そしてそれを言われたであろう少女はこう返した。

「でも…あたしは…」のままじゃ助から…ないから、あなただけでも…生きてくれたらいいなと思つんだ…」

そう言つて彼女は俺を突き飛ばして、何かのボタンを押していた。
それを押すと同時に、俺の田の前のシャッターが下りていく。

「私を忘れないでね…」

俺はその言葉と共に田を覚ました。

新暦75年12月3日、俺は、ミッドナルダを見下す丘に来て
いた。

「毎年ここに来ると、気がまいるよ…・・・・・」

そう言つて俺は薄く笑い、その場所にある、一つの墓に花を手向
けた、

俺は、ひとつ墓の横に、花が一輪添えられてきたのを見た。

「お前は先に来ていたんだな……レン」

俺がそう呟くと、何処からか風が吹き、その一輪の花を吹き飛ばした。

まるで、何かを予言するようだ。

新暦77年 2月26日 PM14:10 ミッドチルダ某所

「…………はありません」

俺は昔のことを思い出していた、

そのためか、部下の隊員の報告をまったく聞いていなかつたので、「すまない、もう一度言ってくれ」

そう頼んでみると、俺が聞き流していたことを分かつていたようなので

「分かりました、では、エリオット部隊長、報告します。

現在犯人グループ12名で、あのビルに立てこもり……

・

と、報告を繰り返してくれた。

「中の犯人達は、人質を10名ばかり取り、未確認ですが、質量兵器を保持しているそうです」

「報告は聞いた、現場へ戻れ」

「はっ、失礼します！」

「…………しかし、またテロ事件か、一体この一ヶ月余りで、何件起きたかもう分からんな……」

俺の名は、エリオット・ラージェスト、階級は一等空佐で、武装隊の一隊の司令官をやっている。

新暦75年に起きた、J.S事件の影響で新体制へと移行している、管理局に対し、過激になるテロ事件、

正直に言つて、事件のレベルが少しずつ上がつてるのは事実であり、対処に当たつている部隊でも、この一年で、類を見ないほど殉職者を出している。

「はあ～、あのおっさんが生きていたなら、多少強引な方法でも、簡単に解決するんだろうけどな・・・」

俺は一人で、そう言つてみると周りに人がいるわけでもないので、ただの独り言でしかない、

ただの・・・・・

PM15:10

先ほど報告を受けてから、一時間あまりがたつた、

「そろそろ定時の報告だところに・・・まあ、報告するようなことが無かったのひつ」

俺はそう考える。

俺は動かない事件を、無理に解決しようとはしない、逆に解決しようと躍起になれば、そのぶん被害も大きくなるからだ。

「エッ・・・・・エリオット部隊長！！」

そんなことを、適当に考えている時間も終わった、

「どうした？」

らしくないぞ、少し落ち着いたらどうだ

全力疾走で走ってきたのか、物凄く息を切らした状態で大声で俺を呼んだ、

だが、俺は彼の報告を聞くことができなかつた、何故なら、

「伏せろ！！」

俺は、報告に来た彼に叫んだ、何故なら・・・・・・
彼の後ろには、一機の4型ガジェットドローンが巨大な刃を構えていたからである。

彼が俺の言葉を聞き、後ろにいるガジェットの存在に気づいたのか、急いで回避に移ろうとしたが、ガジェットの方が速く、隊員の体を胸から真っ二つに分断した。

俺は叫ぶことも何もしなかつた、

叫んだ所で無駄なのだ、切り裂かれたのは胸・・・・・

その上、内臓の大半が流れ出していた。

医学的知識のあまり無い俺でも、彼が即死であることは分かつた。
「質量兵器を保持している・・・・・か、
やつてくれるじゃないか！、クズ鉄・・・・・
フォルス！起動」

俺はデバイスを開いて構えた。

プロローグ…とある事件の始まり（前編）（後書き）

さて、読んでくださった、皆様ありがとうございました。
更新速度は限界に近い速度でがんばるのでよろしくお願いします。

プロローグ・とある事件の始まり（中編）（前書き）

取りあえず遅くなつてすみません。
テストが終わつて急いで書いたので、微妙な感じになつていますが、
取りあえず寛大な目で見守つてください。

プロローグ…とある事件の始まり（中編）

「俺たちは何がしたいんだろ？　な・・・・・」

親友は呟いた、俺たち四人は死んでいった仲間のことを思いながら

ある計画を実行することを決める。

そしてあいつは、はつきりと言つた。

「俺は、奴等を許さない……。だから俺は今日この剣に誓う。
たとえ何千何万。何億の屍の上に立とうと。絶対に復讐を成し遂げると……！」

たぶんあの瞬間俺は、あいつを止めるべきだつたんだと思う。
あいつには、復讐なんて出来ない。だからあいつは苦悩する。
それが分かっていたのだから……。

ツト4型と相対している

真逆にいる、ガジェット4型もじつとカメラでこちらを見つめて、刃を構えている。

俺が動き出そうとした時・・・

爆発

爆炎が巻き起こった、俺の後方・・・・部隊の展開位置の後ろから、爆発が起こったのである。

不意打ちであつたため、俺は爆風に吹き飛ばされ、俺はガジェット4型の刃の射程に入ってしまった。

斬

俺の目の前に、ガジェット4型に刃が突き刺さる。ガジェットが一撃目を振り下ろす前に俺は、

「六式転移陣」

親友が伝授してくれた、魔法でこの事件の、最前線へと進んだ。

ほんの少し前、事件現場。

僕の名前は、ショーラード・・・・ショーラード・C・ロウラン。

たいていの人は僕のことを、ロウと呼びます。

階級は、一等空尉でこの部隊の副隊長です。

今現在僕が居るのは、テロ事件真っ盛りの中・・・。

立てこ

もつ犯との面めぐらし合戦中です。

「はあ～、何でこんな事件が続くんでしょう」

そんなことを一人呟いてみると……

轟音

僕達の後方で、突如聞きなれないほどの爆音が聞こえた。しかもその爆音と共に、タイミングを合わせる用に、中に立てこもっていたはずのテロリスト達が、一斉に飛び出してきた。

「全員、持ち場について落ち着いて交戦してください。絶対一人だ戦わないで、全体で囲むようにする」と

僕は、Hリオット隊長の命令どおり、指示を出すと、こちらに向かってくるテロリストに備えた。

その時だった。

いくつもの閃光が、テロリスト達を貫いて、真っ赤な血が吹いた、そして続いて響くのは悲鳴。

それは僕達、武装隊から出なく、こちらに向かってきているテロリストの方から飛んでくる。

『助けてくれ……』

そんな声が聞こえた気がした。

だが、その時の僕には、何が起こっているのか分からず。ただ、呆然と見ているしかなかつた……。

すべてのテロリスト達が、惨殺されたあと、ここには地獄でしかなかつた。

「酷い、何故こんな事に……」

僕は完全に油断していた。

だから、忘れていた。

まだ、テロリストを惨殺した、謎の閃光の正体に気づいていなかつたことに。

「ロウラン伏せろ！…」

いつも仲良くしている、同じ年の隊員の声が響くが、僕にはわけが分からぬ。

だが、気がついた。

僕の真後ろには、鋭い刃をつけた。

二年前の災厄の事件の時に現れた、ガジェットドローンの4型だつた。

気づいた……。だが意味が無いのだ。

僕の速度では、回避しきることが出来ない。

その上デバイスを起こさうにも、立ち上げるよりも早くあの刃は落ちてくるだろ？。
圧倒的な積だ。

だから僕は、覚悟した。
目をつぶり、痛みに備えた。

10秒あまりたつただろうか。
恐怖で時間の感覚がズレているだけかも知れない。
だが、音も無く何も無いはずがないのだ。
恐る恐る、僕が目を開けると・・・・・。

「悪い、ロウラン。

俺は男の白雪姫には興味が無い……だからさつさと起きるー！」

僕の目の前には、隊長がいた。

そもそもとも頼りになる……あの人気が。

ほんの少しだけ、遡ろづ。

ロウランが刃を覚悟し目を伏せた時。

彼とガジェットの間、3mの間に、円形の魔法陣が現れた。
そしてその中からは、杖を構えた魔導士が現れた。

それは言うまでも無く、先ほど逃げたエリオットだったのだ。
彼は自分が現れた瞬間、ガジェットの腕が引かれたのだ。

つまり彼は逃げた時とほとんど換わらないといひに出たのだ。

何だと！！

彼は自分の行つた魔法を疑つたが、この状態になつては仕方が無い
いと思い。

その攻撃を防ぐために、

「3回フォーム、デス！！」

彼は自分の切り札とも言える姿を出したのだ。

その姿は死神、

真っ赤に燃える死神。

そして、手に握られていた杖は、鎌のような形に変わり、

刃の部分からは、真っ赤な炎が出ている。

そして、その死神の刃は、

金属で作られた騎兵の刃を、一瞬で液体に変えてしまった。

そして、彼はロウランを見たが、

いつまでもビビッて、目を開けない。

10秒ほど待って、さすがに痺れを切らした、エリオットが、

「悪い、ロウラン。

俺は男の白雪姫には興味がない……。だからさつと起きやー！」

！

以上が、ロウランが無事だつた顛末である。

「ハーケン・オブ・フレイム！－！」

俺が放った魔法は、刃に付けられている炎の鎌を、飛ばし、
その炎で焼き尽くす攻撃だが、

今度は、先ほどのように屑鉄は溶けない。

理由は簡単、

この炎は、手元にあるつむぎ、摂氏2000　超まで、温度を引

き上げることは出来るが、

飛ばした炎は、せいぜい摂氏700　が限界である。

金属の融点は、1500から2000の間であるためさすがに飛ばした炎では、鋼鉄を融解させることは出来なかつたのである。

が、しかし、爆風により、ガジェットとヒリオットの距離はある程度開く」とが出来た。

「ヒリオット隊長……。本当にすみません……」

この状況下で謝っている場合か……と、俺は怒りたかったが、正直言つて、あまりいい状態ではない。

取りあえず状況から、テロリストはたぶん全滅だろう、様子を見れば大体分かる。

だが、同時に人質も全滅しているだろう。
まあ、テロリスト達がこんな状態なんだ、無事である方がおかしい。

大体の考えがまとった所で俺は、部隊員に指示を出す。

「総員退避……！」

…………。

アレフ、何故みんな無言。

「ヒリオット隊長……。いきなり逃げるんですか」

「状況的に撤退した方がいいだら、この状況なら……」

おかしい、まともに戦力分析した結果、『逃げるべきだ……』といふ。俺の本能が言っているんだが、なぜか知らんが、俺が間違っているのではないかと思えてきた。

俺がこんなことを考えている間に、俺を追つていひままでやつて来た、もう一機の4型と、テロリストを始末したであら、ガジエットドローン^{3型}が出てきた。

「仕方が無い、総員、対質量兵器用の電撃網を用意して、さつさとあいつらの回路を停止させるぞ……」

そう命令を下したあと、すぐにロウランのそばに行つて、『俺とお前は、あいつらの足止めだ……』と言つたら、死ぬほど嫌そうな顔をされた。

まあ、何を言われようと、俺たちが足止めをするのだが。ここで部隊員の一人が重大なことに気がついたそうなので、俺はその報告を念話で聞いていた。

《隊長、報告です》

俺は一機の四型を、鎌で牽制しながら、

一機の三型の相手をしている。

どうもこいつ等には、相互リンクと学習能力があるらしく、一撃目の炎で懲りたのか、俺に近づこうとしてこない。

まあ、その代わりに、三型の砲撃は、滅茶苦茶飛んでくるんだけどね。

『あまり余裕は無いから、手短に頼む』

さすがに、俺に余裕が無いことを感じたのか、少しばかり緊張の色が見える・・・・・いや、窺えるだな、見えてないし。まあ、このとき俺は無駄なことを考えていた気がする。余裕が無い時ほど無駄が出る、それが人間の本質的な問題点だ。まあ、そんな事はさて置き、内容に耳を傾けると……。

『……非常に申し上げにくいのですが、スパイダーボルト電気網の常備が・・・・・三つしかないんです』

俺はこのことを聞いた時、チョットだけ・・・・・ほんの少しだけ、焦った。

『……非常に申し上げにくいのですが、スパイダーボルト電気網の常備が・・・・・三つしかないんです』

この連絡は、隊長から少し離れた所で、ガジェット三型と戦う、僕の所にも届いていた。

隊長と違い、ほとんど余裕の無い僕には、あまり考えている時間

は無く、

この手に握られた剣、『ショーラード』を構えながら、一回、二回と切りつけていくが、一向に傷がつかない。

この状況はマズイ……。と僕は考えのですが、スパイダーbolt電気網が使えないのでは、打開する方法も無い。

そんな事を考えていたら、エリオット隊長から念話が来た、

『口ウラン。 無事か!』

『今の所は大丈夫です……』

僕は切羽詰った状態で必死で答えていた。
それを察したか察していないかは、分からぬが、
隊長は手短に作戦を伝えてきた。

『じゃあ、前の奴から目を話さないよつ、注意しながら聞いてくれ』

エリオット隊長は、そこで一旦句切ると、
本当に手短に、説明してくれた。

『全力でこいつちまで逃げて来い、そつすれば何とかする』

なんて簡単なんだるつ……。そういう感想を僕は考えたが、
深く考えている余裕など無く、取りあえず。

『分かりました。 全力でそちらに向かいます』

そう答えると僕は、本気で・・・自分の限界に近い速度で、
飛んで逃げ始めた。

後ろを見れば、あの丸い奴も、
僕に砲撃を打ちながら、いつかを追つてくる。

『口ウラン。あと300mだ！』

エリオット隊長の声が聞こえてくる。

そして、後ろを気にしながら前を見ると・・・・。目標地
点で、必死に三機のガジェットと戦っている、隊長の姿があつた。

・・・・・・・・・・はつ？・・・・・

俺の目の前に見えるのは、どう見たって何とかギリギリで凌いで
いる、
隊長の姿が見えている。

『口ウラン、何をやっているんだ！ 準備は出来ているんだ、さ
つさと来い！』

少しばかり啞然として、動きが止まってしまった僕に、
隊長は念話の音量を最大にして伝えてきた。

その言葉を聞いて冷静な判断がある程度で切るようになつた僕は、
隊長の方へ向かつた。

ヒリオット

「やつと……。やつと俺の出番が来たーーー！」

ロウラン

「隊長、五月蠅いですよ」

ヒリオット

「今まで作者がサボっていた分を、たつた一週間で書かせたんだ。
なんとなくテンション上げないと可哀想だろ」

ロウラン

「否定事態はしませんが、昨日までテストだつたんですから、この
オマケだつて書きたくないのですが？」

ヒリオット

「今日は短く切り上げるとあるか。…………」
早速「一ノ瀬」に入りたいと思います！――

ロウラン

「言つていい」といやつてこる事がまるで違つ……。まあ、取
りあえず最初の一ノ瀬は――」

ヒリオット

「一ノ瀬は…………なんだろうな…………」

ロウラン

「うわあ～テンションだけ無駄に高くてやつてるとグダグダだ
……。って感じの評価受けますね、確實に…………」

エリオット

「『ホン……。取りあえず最初のコーナーは、『ネタバレ！！』』

ロウラン

「隊長……。貴方この作品の存在意義を消す気ですか！！」

エリオット

「だつてこうした方が早いじゃん……。きっとあの作者は、伏線を消化する前に、力尽きるからさ……」

ロウラン

「否定はしません、否定は……。でもネタバレはちょっと、マズイ気が……」

エリオット

「最初のネタバレは、『俺が生会を、ハーレムにするーー』」

ロウラン

「ネタバレ以前に、話が違う……」

エリオット

「なかなかいい案だが、生徒って何処にあるんだ？」

ロウラン

「生徒会つて言つたら……。ああ、アレです！取りあえず作者が、楽しそうだしやろつかなつて参加した。テスタメント先生主催の『私立聖祥大附属学校日常録』Nanoha Rumble！で、学校を仕切っている人達のことです」

エリオット

「学校を仕切つてこるのは、『はやし会長、タカト会長』……。
俺はここに宣言する、わが家の宣言せよ！」

ロウラン

「それは良かった。では隊長も壊れ始めたといひで、次回につま
で続く『プロローグの後編』でお会いしましょう！」

ヒリオット

「そこは俺の…………。（時間切れにより削除されました）」

プロローグ…とある事件の始まり（中編）（後書き）

次回から、正式におまけがスタートします。

何やうか決めてないんで、こんなのでも遣ればって人を募集します。

さて、次回の更新はいつやら、一ヶ月以内に更新はしたいですね。

プロローグ…とある事件の始まり（後編）（前書き）

「うん……少しだけ反省はしています。

s h a d o w は真面目に書いてたが……」「トロエードもひとつ呼べ
書けるよ」といします。

ちなみに今回も總じてないカギ手抜きです。

プロローグ・とある事件の始まり（後編）

とある世界のことだった。

それは、管理局と敵対するテロリストたちを掃討する戦いだった。

だが、俺はその戦いには行けなかつた。

それは俺だけではなく、他の奴もだつた。

そこにいたのは、たつた一人……体の傷も心の傷が癒えていないはずのレンだけだつた。

あいつは俺たちに嘘の情報を流して、別の場所にいを変えた拳句そこに閉じ込めたのだ。

俺たちはあいつが死んだと思っていた……だからせめて死にざまを見に行こうと、その世界に向かつた。

そう、戦いがすべてが終わつた後、俺たちが見たのは……傷一つ、返り血すら浴びずに、ただ一人地面で眠る、レン・クロフイールの姿だけだつた。

そして俺はその日から、親友の姿を見失つた。

別にあいつが行方不明だつたわけじゃない……あいつがあいつで無くなつただけだ。

それまでのレンは、不器用ながらも感情を表現し、自分と人との関係を大切にしながら人と接する事が好きな奴だつた……。

だが、事件の後のレンは、まるで人が変つてしまつたようになつ

ていた。

自分の事を否定し。

大切な物を見失い。

生きる意味さえ見失つた。

屍のような姿だった。

初めてレンを見た知り合いはこう言った。

『彼は何で優しくて他人思いなのか、それに加えて謙虚で人が良い、彼ほど素晴らしい人間はない』

俺はその言葉を聞いたとき、完全にレンが、レンでない事を知った。

ただ、それだけだった……。

だが、あいつはこう言った。

『俺の砕けた欠片が、復讐を……仇討をつて言ってくるんだ……』

だから俺はあいつを信じている……。

砕けた心に残った、レン・クロフィールの存在を、俺は信じ続ける……。

「フレーム・スラッシュユー！」

真っ赤に燃る炎。

その炎は迫りくる光をすべて落とすが、それ以上の戦果は期待できないようだ。

「ちつ……」

エリオットはその様子を見ると、吐き捨てるように舌打ちをして、攻撃の手を止め一歩下がる。

彼の今いた部分には、別のガジェットの攻撃が飛来していた。

今、現在エリオットが頭の中で考えているのは現状の打破……そのための布石として自分の部下に作戦があるからこっちへ来いと言つておいたのだが、なかなかこっちに来ない。

畜生……何やつてやがんだ……ロウランの奴は

彼は、ほとんど無駄のない動きの中に、一瞬のすきを作る事になると分かりながらも、なかなか来ない神風^{ロウツク}を呼びだすために、思考を一瞬別の事に回すことを決めた。

『ロウラン、何をやっているんだ！ 準備は出来ているんだ、さつさと来い！』

エリオットの魔力値で相手の脳を破壊しないように気を付けた大きな音量の念話で、ロウランへのメッセージは発せられた。

「これで大丈夫か……」

その一瞬……たつた一瞬だけ気を緩めてしまったエリオット。

その隙を狙う様に三機のガジェットはエリオットを狙うが、このガジェットたちに心があれば多分こう思つただろう……所詮は一瞬の隙であつたと。

そうエリオットはすべての攻撃を何の気なくかわしきつた。

前後から来るガジェットの刃を……。

それと同時に発射された、砲撃を……。

何も気にすることなくかわすと、走りくるロウランと念流するため彼も動いた。

最初に行つた事はいたつて単純。

自らを囲むように展開していたガジェットたちを、炎を使う事により一定の方向に回避させた事。

そして……。

「ルイン…ブラスト…！」

そしてノンチャージの砲撃を、ロウランを追つていたガジェットにぶつけ、距離を大きく離させる。

それだけの行動で、四機のガジェットたちは単機孤立の状態へと陥らせた……それが『本物の天才』と言われたエリオットの実力であつた。

「今だ！！ あの片腕の無い四型以外に狙いを付けて撃て…！」

そう響くエリオットの声……それを合図に、今まで用意を重ねてきた局員たちがとある技術者が開発した網を発射。

それに絡みとられたガジェットたちの動きは見る見る鈍くなつていき、

バチッ。

と一回大きな音を立てる

三機のガジェットたちはまるで先ほどまで動いていた事がウソだつたように止まつた……。

だが、それが現実であった事を証明するよつに最後の一機が……力強くその腕を振り上げていて見えた……。

「さて、どうしたものか」

先程まで四機のガジェットドローンの改良型が暴れていたため、あまり息の付く事の出来なかつた現場に、少しだけ安心感とあと一機いるという緊張感が漂つ中で、エリオットはふとこのような事を言つていた。

エリオットの魔法は。

異常なほど強い……。

それゆえに常に押さえていなければならない……そんな状況があるためエリオットは自分の魔力を自分の魔力で抑えるという、よくわからない状況を作つてゐる。

そしてそれは今の状況では少し拙い事になっていた。

まだあと百隊は破壊できそうな魔力を保有しているエリオットだが……町中の、それもすぐ近くに仲間がいると言う状況では彼の魔法の行使状況に問題を出しているうえ、……

抑えている方の魔力が、そろそろ限界に近づきつつあるのであった。

その上で……。

(The flame of the Lord, take extra melted.) 【主の炎で、溶かしてしまいましょう】

その上で……珍しくエリオットの言葉に反応したのは彼のデバイス、フォルスであった。

「今の状況分かっているんだよな、フォルス……」

少し苛立ちの入った声で、自らのデバイスに話しかけるエリオット。

彼は目線の先では、ガジェットの方を見てはいるが、それよりも、長年連れ添つてきた相棒の突つ込みどじる満載の言葉の方が気になっていた。

(It is of course, we know until ten from scratch) 【それは勿論、一から十まで分かつています】

「それなら……」

そうエリオットが言いかけたところで……フォルスはエリオットを諭すようにこう言つた。

(So would you him with his Lieutenant) 【だから貴方は、彼を副官にしたのでしょうか】

そう言われてエリオットは振り返る……。

旧知の親友と同じ蒼い髪。

手に握られた細い剣。

そして何より、強い瞳をもつた少年。

ロウランを見たエリオットは、少しだけ彼を見て固まつた。完全に、頭が止まつていた。

だが止まる寸前に決めた事を、行うだけの決断は下していた……。

「ロウラン以外の局員は、そのポンコツたちと共に撤退……」

彼の部下たちは誰一人として、エリオットの命令に背かなかつた。背けば死ぬ……エリオットの背中を見るだけでそれを全員が感じ取つたのであつた。

それを確認すると、エリオットは、そう一言だけ言つと……。誰にも聞こえないよう小さな声でこう言つた。

「魔力分断用フィールド、解除……」
(Consent is) 【了解です】

少しだけ……紅みが増した煉獄の装束。

少しずつ、ゆっくりとだが進行していく紅蓮の気配。

それらが解放される直前、エリオットは大きく良く通る声で、口
ウランに言った。

「ロウラン……シヨラードを開放しろ！…」

こうして、炎熱最強と言われ。

相棒を失い、一度と使う事の無い力を彼は解放した……。

その瞬間。

大地は真っ赤な……紅色だけの世界となつた。

事後報告。

以下の者を一月の謹慎処分とし、以下の場所へと異動とする。

エリオット・ラージェストー一等空佐。
シヨラード・C・ロウラン一等空尉。

一月後より……時空管理局特定危険物検査室へと異動とする。

謹慎中及び、異動先責任者……バルト・シェルト一等空佐。

プロローグ・…とある事件の始まり（後編）（後書き）

次回は早めに…… てかまだ shadow の「一月前か」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0075i/>

魔法少女リリカルなのは Light.the.story

2010年10月30日10時54分発行